



Title	デンマーク語の子音(その二) : /g/の音節末実現形と他音素との中和
Author(s)	間瀬, 英夫
Citation	IDUN. 1982, 6, p. 59-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95872
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク語の子音（その二）

——/g/ の音節末実現形と他音素との中和——

間 瀬 英 夫

1.1. 前号の拙論 (*Idun* V, 1980, 3—33) でデンマーク語の閉鎖音について音節末 /-d/ を中心にして論じたが、その際、音節末 /g/ の実現形 (= 発音形) は軟口蓋有声摩擦音 [ɣ] ということにしておいた。しかし、この音は現在までに別の音に変化してしまっており、もし現在用いられるとすれば、老年層あるいはユトランド方言(を基層語とする)話者においてのみであるという (Brink/Lund, 1974, 40)。そこで、今回は [ɣ] がどのような音に変わったか、そしてその結果、音韻体系にどのような変化が起こったか、また起こりつつあるかをみてみることにする。

音声記号について：前回まで IPA を用いてきたが、今回からはデンマーク式 (Dania) 表記を一部改良したものをを用いることにする。この方がいくつかの点で IPA よりデンマーク語音表記に適していると思われるからである。この改良式ダニアと IPA の対照表は本論の末部、参考文献表の前 (p. 83) に示す。また、音声記号の変更に沿って音素記号も一部変更する：/e(:)/→/æ(:)/, /ɔ(:)/→/â(:)/。その他の音素記号は前回までと同じである。

例示は誤解のおそれのないと思われる場合は普通の綴りによって行う。綴り中の ' (アポストロフィー) は stød, : (コロン) は音長, ' および, は各々第一, 第二強勢を示す。文中での, たとえば, /k/→[k] または [k] ←/k/ は「/k/ は [k] で実現される」とか「/k/ の実現形は [k] であ

る」といったように読む。また、綴り字による例語中で、とくに断りのないときは $k = /k/$, $g = /g/$ とする。また、便宜上 $[i]$ は $[j]$ とする。

1.2. 前号で $/k, g/$ について述べたことをまとめてみる (*Idun* V, 4—9, 23f.)。

強母音 ($/ə/$ 以外の母音) を含む音節の第一頭子音としては $/k/ \rightarrow [k]$, $/g/ \rightarrow [g]$ 。ただし、 $/k/$ は語頭以外の無強勢音節では $[g]$ となる場合が多い:

$/k/$: ked kold kæmme kane ka'kao 'kaffe, kande

$/g/$: ged gold gemme gane gi'gant 'gå, gade

$/k/$: klat kro kny kjole kvinde

$/g/$: glat gro gny gjorde —

音節頭第二子音としては $/s/$ の後にしか現れないが、このときは $/k/$ と $/g/$ は中和し、 $/g/$ のみ現れ、 $[g]$ で実現される (cf. op. cit. 7f.): $sk- = /sg-/ [sg-]$:

skaffe (cf. kaffe, gaffel), skænde (cf. kende, genne), skjorte, skrive, sklerose, skvadder etc.

音節末では、 $/k/ \rightarrow [g]$, $/g/ \rightarrow [ø]$:

$/k/$: gik sne'dker præ'k bak lok rok

$/g/$: ri'g e'gern præ'g ba'g klo'g skro'g (船体)

$/k/$: ark val'k vask akt seks

$/g/$: ar'g val'g — — —

以上の記述は /g/ の音節末実現形を除き変更はない。

1.3. 音節末で /k/→[g] ということは、次の語の *g(g)* は *k(k)* と同様音素的には /k/ ということである（＝は音韻的に同一であることを示す；以下同様）：

pig [pig], brig = brik [bræg], ryg = ryk [rög], tryg = tryk [trög],
glug [glug], dug [dug] (露), mug = muk [måg], log = lok [log],
etc. ;

pligt, kon'flikt, digt, vægt, sekt, agt = akt, lugt = lukt, etc. ;
slags (種類), laks ;

kigge = kikke, tigge = tikke, lægge = lække, begge = bække,
tygge = tykke, hugge, etc.

なお、次の [-g] (/k/) の前の母音は長母音であるが、これは例外で、この他の場合 /k/ の前の母音は短い：

præ'k, sne'dker (*d*=無音), æ'g, læ'g (n.), væ'g, skæ'g (n., a.).

したがって、音節末 /k/:/g/ の最小対立のペアは præ'k : præ'g, læ'g (n.) : læ'g (a.) の例外を除けば母音音長の相異を無視しなければできないことになる。

1.4. さて、[ø] の音変化の結果、/g/ の音節末実現形は現在までに次のように変化した。

(i) : 狭母音状音 [i:, y:, u:] (←/i:, y:, u:/) の後ではゼロとなる（＝発音されない）：

rig, lig, rige, lige, ligne, igle; syg, ydmyg, prygl, syge, sygne; rug, trug, sluge, bruge, bugne, kugle, *etc.*

なお, ligne, prygl, bugne などの *-gn*, *-gl* の前の *i*, *y*, *u* は本来音素的には短母音であったが, [ø] 脱落後は長母音となった。

(ii): (i) の [i:], [y:] 以外の前舌母音状音の後および [ɪ] (←/ɪ/) の後では [j] と なる。そして, 若年層ではゼロになる傾向が強い:

neg, veg, neger; læg (a.), læge, væge; bøg, søge; bag, lag, kage ([â:]←/a:/); salg, talg, vælge, følge, *etc.*

前舌母音状音も [ɪ] も非後舌 ([-back]) の音なので, 規則(ii)は, (i) 以外の非後舌音の後では [j] (またはゼロ) となるといえよう。

(iii): その他の場合, すなわち, (i) の [u:] 以外の後舌母音状音および [ɪ] (←/r/) の後では [w] となる。ただし, [o:] の後では随意的にはあるが, 以前からゼロとなることが多い:

[o:]: filo¹log, nekro¹log; [â:]: klog, tog (n.), sprog, tåge; brag ([ɑ:]←/a:/; cf. bag ([â:]←/a:/); faglig [fawli]; bjerg, arg, borg, sorg, sørge, *etc.*

[ɪ] は後舌音なので(iii)の規則は(i)以外の後舌音の後では [w] となるといえよう。Bag [bâ:(j)] と brag [bra:w] の母音音素 は両者とも /a:/ であるが, 実現形が前舌 [â:] 対後舌 [ɑ:] なので /g/ の実現形が異なる。

規則 (i) — (iii) 全体について言えることであるが、音節末 $/-g/$ (以下、ハイフンをつけた $/-g/$ は音節末 $/g/$ のこととする) の現れる音環境は、母音直後では *faglig* [*fawli*] などの $[a]$ を除けば長母音 (状音) の後にしか現れない。一方、 $/-k/$ の前の母音は例外 (cf, §1.3. 終り) を除き短母音である。 $/g/$ が子音の後に現れるとしたら、 $/l/$ か $/r/$ の後にしか現れない。ただし、 $[ʊ] \leftarrow /ng/$ と解釈する場合は $/n/$ の後にも現れる ($[ʊ]$ の問題は §2.11. で述べるが、それまでは一切除外して論を進める)。

1.5. 上述の三つの規則は大体 $[ʊ]$ の音変化の過程と並行する。Brink/Lund (1974, 39—42; 1975, 284—304) は1840—1955年の間に生まれたコペンハーゲン人 (概略, 標準語話者) の発音を調査し、次のように記述している。

次の場合の $[ʊ]$ は調査期の初期までにはほとんど消滅していた: 狭母音の後 (cf. §1.4. (i) の例); しばしば $[o:]$ の後: *kata'log*, *filo'log*, *tog* (v.), *drog*, *slog*; このほか, *egentlig*, *tage*, *taget* (v.), *dag*, *goddag*, *bagefter*, *undtagen*, *lagde*, *sagde* などの日常語において。また, *vogn*, *dog*, *og*, *rogn*, *vågne* などの *g* は二重母音第二要素としての $[w]$, 同様に *røg*, *smøge*, *egn* などでは $[j]$ が正常な形であった。

$[ʊ]$ の音変化はもちろん一度に起こったわけではない。最初の変化はすでに1840—1870年生まれの話者にみられるもので, Type 1: (a) 前舌母音状音および $[ɪ]$ の後 ($\rightarrow [j]$): *neg*, *neger*, *klæg*, *læge*, *kage*, *søge*, *Køge*, *vælge*, *følge*, *etc.*; (b) 円唇後舌母音状音の後 ($\rightarrow [w]$): *klog*, *sprog*, *koge*, *nogen*, *dogma*, *etc.*; (c) 円唇母音 + 円唇の $[ɪ]$ の後 ($\rightarrow [w]$): *borg*, *sørge*, *Børge*, *etc.* これらの場合の変化は舌の前後の位置の変化にすぎない。次に, Type 2 として, $[a]$ の後で $[ʊ]$ が $[w]$ となる場合だが, この $[w]$ は舌の位置および舌の構えの変化である: *sagn*, *daglig*, *faglig*, *Ragna*, *Dagmar*, *sagfører*, *magnesium*, *etc.* この変化は1870—1905年生まれの話者から始まった。最後に, Type 3 と

して [ɑ:] および非円唇母音+非円唇 [ɪ] の後の [ø] が1905—1922年生まれの話者で [w] となる: brage, drage, krag, arg; bjerg, mergel. そして, 1922—1955年生まれの (つまり1922年以後に生まれた) 話者では [ø] は一切用いられなくなった。

以上が例語も含め Brink/Lund の記述するところである。これを見ると, [j] がさらにゼロに変化するのに対し, [w] が未だ保たれているのが [ø] の音変化の過程に並行するものであることがわかる。また, [w] はより正確には非音節的な [o] といわれるが, そうだとすれば, [o: w] 結合では [o:] の後で [w] が脱落するのは音声的に自然であるといえよう。

2.1. 音節末の /-g/ がゼロ, [j] または [w] で実現されるようになった結果, 音韻体系にいくつかの変化が引き起こされる。まず, 音節末の /k:/g/ の対立が閉鎖音 [g] 対ゼロまたは無摩擦継続音 [j], [w] で実現されるという変則的な形となった。次に, [j], [w] は各々 /-j/, /-w/ の実現形でもあるので, 音節末 /-g/ と /-j/, /-w/ との間に中和が起こる可能性がある。さらには, /-g/ がゼロで実現された場合, /-g/ という音素自体が脱落するという場合も多々生じよう。

以下これらの音韻状況を順次みていくことにするが, その際, §1.4. で述べた規則が有効であるという前提で論を進める。なお, §2. で例示する語のほとんどは形態音韻変化によって発音が変わるというようなことがない語である ([g]~[j]~[w]~ゼロなどの交替については §3. で述べる)。まず, 簡明な場合からみていくことにする。

2.2. /-g/ が狭母音状音の後で発音されなくなってから久しいが (cf. §1.5. の初め), この場合, 綴り *g* によって示される部分が音素的に /g/ であるということは不可能である。つまり, *g* は音素としては存在しないことになる。以下の土 *g* のペアは音韻的には同一構造の語である:

vig=vi(e), dige=die, ligne=line, signe=sine, sygne=syne,
dug (布(地))=du (v.), rug=ru, kugle=kule.

同様に, *g* が音素として存在すると主張する根拠のないものは, たとえば:

flig, lig, figen, hige, pige, strigle; byge, prygl(e), trygle;
bug, fugl, smug, fuge, luge, uge, ugle, *etc.*, *etc.*

(ついでながら, 弱音節中ではあるが, 形容詞派生辞-(*l*)ig の *g* も同様にずっと以前から音素的には存在しない。)

2.3. この他に音節末 /-g/ がゼロとなる可能性は前舌母音状音, [ɪ] または [o:] の後である。もしゼロだとすれば, §2.2. の狭母音後と同様に音素としては存在しないことになる。

前舌母音 (状音) 後: eg=E, veg=V, sneg=sne, eger, neger,
regel; læg (a.)=læ, træg=træ, klæg=klæde (v.), hæge, læge,
væge; bøg, skøge; age=ae, hage, kage, plage, *etc.*

これらの /-g/ がゼロではなく [j] で実現されるとする場合, および [ɪ], [o:] の後での /-g/ については後述する。

2.4. §2.2. (=§1.4. (i)) の狭母音の後では, たとえ音素として /g/ を認めても, 常にゼロで実現されるが, §2.3. (=§1.4. (ii)) の環境の場合, 十台以下の年令層では確実にゼロとなろうが, それ以上の年令層では [j] となる場合も多々ある。また, 後舌母音状音または [ɪ] の後では [w] となり, これはゼロとなることはない。そこで, 次に音節末 /-g/ が

[j, w] で実現される場合をみてみることにするが、その前に「短母音状音」について説明をしておきたい。

短母音状音は二種に分けられる。一つは短母音（音素）の実現形としてのもので、これは特殊な強調以外では長音化することはない。たとえ長音化されても音質は変わらない。もう一つは長母音（音素）の実現形としての長母音状音が短音化されるもので、これは単音節形または語末強強勢音節中の長母音状音が音節末の無摩擦継続音 [j, w, ɪ, ʊ] に後続されるときに起こるものである。この場合、長母音状音の質は短音化されてもそのまま保たれる。

2.5. §2.3.に示した前舌母音状音後では /-g/ は [j] となるが、/-j/ は長母音音素の後には現れないので（ただし、§2.7.をみよ）、[j]（←/g/）の前で長母音状音が短音化されない限り（つまり、複音節形の場合）/-g/ と /-j/ の中和はない（短母音状音+[j] については§2.6.で述べる）。

後舌母音状音の後では /-g/ は [w] となる。[w] は /-v/ の実現形でもある。この場合、長母音状音の後でも /-g/ と /-v/ は中和する：

lāge=love [lá: w:], vāge=vove [vā: w:], koge, alkove [ká: w:], al¹kā: w:], krage=krave [kra: w:], brag=brav [bra:w].

これら *g* 綴りの [w] を /g/ から派生させることはもちろんできるし、不定詞形 koge [ká: w:] は kōgt(e) [kōgd(ə)]（過去形、過去分詞形）との間に [w]~[g] の交替があるので、この [w] を /-v/ の実現形とすることは無理であろう。しかし、全体としては後舌長母音後の /-g/ の存在は非常に影がうすい。ただ、/-v/ の実現形は長母音後では [w] でなく、未だ [v] が用いられることもあるので、一応上例中の *g* は /-g/ として存在するとみてよいであろう。

/-v/ は /o:/ の後に現れないので、[o: w] は /o: g/ の実現形とい

うことになるが、これについては§3.1. (4)で述べる。[u: w] はふつう現れないが、この [w] は /-v/ の実現形である。/-g/は狭母音（状音）の後ではゼロになるからである。

2.6. 次に、/-g/ が短母音状音後に現れる場合をみてみよう。[j] が短母音の実現形としての短母音状音の後に現れるのは、基本的には [aj, ɔj, uj] 結合の二重母音第二要素として現れる場合しかない（「二重母音」は音声的な単位とする）。[a, ɔ, u] は後舌母音状音であり、/-g/→[j] は前舌母音状音の後に現れるので、この場合の [j] は /-g/ ではなく、/-j/ の実現形ということになる。すなわち、[aj, ɔj, uj] は各々 /aj, ɔj, uj/ の実現形である。これらの中、[uj] は hu(j)e [hu(j)ə] (←/hu(j)ə/) にしか現れないので、生産的なのは [aj, ɔj] のみである。実の所、この音声的状況の大部分は [ø] の音変化以前から続いているものである (cf. §1.5.)。また、/-g/ の前の母音は前述のように原則として長母音である。したがって、短母音後に /-g/ が現れないことは一般的に十分予想される。さらに、/-g/ からの [j] は脱落することがあるのに対し、[aj, ɔj, uj] の [j] は決して脱落することはない。したがって、この環境には /g/ は現れないので、/j/ との中和はないことになる。

このようなわけで、次例中の *g* も *j* も音素的には /j/ ということになる：

/aj/ → [aj]: segl = sejl, lege = leje;

/äj/ → [ɔj]: løg = løj, smøge, møjje.

このほか、*g* 綴りのもの：

/aj/: jeg, mig, bleg, hegn, negl, egen, pege, tegne, kegle, etc.;

/äj/: spøg, strøg, døgn, gøgl, nøgen, nøge, søgnedag, nøgle, etc.

2.7. [-j] 二重母音としては、このほか外来語に現れる [æ(:)j], [ø: j] がある。フランス借入語の‘フランス語風’発音形 [kɔŋ'sæ: j] conseil, [fo'tø: j] fauteuil などの [æ: j], [ø: j] とか英語からの ['bæjbi] baby, ['æsæj] essay などに現れる [æj] である。これらは主として二十世紀になってからの比較的新しい借入語にみられるものであるが、この [-j] は音韻的にどのように解釈されるであろうか。

長母音+[j] に終わる一音節語で [j] が脱落せず、長母音状音+[j] で実現されると、[e:j], [æ:j], [ø:j] (および一部の話者で [ä:j],) であり、短音化すると (これが一般的だが) [ej'] [æj'], [øj'] ([äj']) となる。[ø:j] は長母音 + /g/ としては存在しない。

さて、フランス借入語の [æ: j], [ø: j] は語末強強勢音節に現れているのにもかかわらず、stød をとらない。英借入語の essay ['æsæj] の [æj] は弱音節に現れており、二重母音が弱音節に現れることは一般にない。もし ['æsæj] の [-sæj] が強音節だとすると stød が現れていないことになる。一般に英借入語、とくに新借入語は stød をとらない傾向にある：たとえば、guide [gajd], ladylike ['læjdi 1, lajg], breakdown ['bræjg, dawn]。したがって、stød に関してこれらの外来語にのみ現れる二重母音は長母音 + /-g/ から派生の二重母音とはふるまいが異なる。

また、これらの外来語の [j] は決して脱落することはない。そして、[j] は前述のように /-j/ の実現形である二重母音第二要素として既存する。

以上のような理由で、これらの外来語の [j] を /-g/ とする積極的な理由はみつからないので /-j/ とするが、その場合 /-j/ の前にも長母音状音が現れることになり、例外となる。しかし、この長母音状音も現今では短音化される傾向にある。いずれにせよ、/æ: g/ 派生の [æ:j, æj'] と仏・英借入語の [æ: j, æj] (← /æ: j, æj/) とは stød は別として部分的に中和するといえよう。[ø: j] (← /ø: j/) は上述のフランス借入語にしか現れない。

上述の外来語は例外として、*/-g/* からの [j] が長母音後にのみ現れ、*/-j/* からの [j] が短母音後にしか現れないとすれば、両者は相補分布をなすことになる。しかし、これを一つの音素にまとめることはむずかしい。*/-g/* からの [j] が不安定でゼロになることがあるのに対し、*/-j/* からの [j] は常に発音されるからである。

2.8. 二重母音第二要素としての [w] は [j] とは異なり、あらゆる短母音状音の後に現れ得る。まず、前舌短母音状音の後では次のようなものがある：

[iw]: *tvivl, tvivle*;

[ew]: *peber, pebre(t), Pabling*;

[æw]: *hævd, hævn, kævl, hævde, nævne, kævles, bævre, etc.*;

[äw]: *drev (n.), rev (n.), revse, revne, revle, etc.*;

[yw]: *lyv, syv, tyv*;

[øw]: *løvfald*;

[öw]: *döv, snövs, snövl, bøyse, stövle, Europa, etc.*;

[öw]: *dröv, röv, vrövl, vrövle, etc.*

これらは、*løvfald* を除き、いずれも形態音韻交替のない場合の例である。*Løvfald* [¹løw₁fal¹] は *løv* + *fald*, すなわち, [lø:w, løw¹] (<-/lø:v/) を前半部とする合成形である。

これらの二重母音の中、[iw, ew, yw] (および [øw]) はごく少数の語にしか現れず非生産的であるが、その他のものは生産的である。これらの二重母音は全て前舌短母音の実現形である短母音状音 + [w] なので、この [w] は */-g/* の実現形ということではなく、*/²v/* の実現形である。

後舌短母音の実現形である後舌短母音状音 + [w] の二重母音としては [aw], [ɔw/äw] がある ([ɔw] と [äw] は個人間で動揺のある自由変異

形であるが、以下では [ɔw] を代表形とする):

[aɔw]: sagn=savn, nagle=navle, agn, havn, hagl, avl,
Agnes, avne, *etc.* ;

[ɔw]: dog, tov, vogn, ovn, sogn, klovn, vagne, kogle, *etc.*

さて, [aɔw, ɔw] の [w] は後舌母音状音後に現れているので /-g/ の実現形とも考えられる (cf. §1.4.規則 (iii)). しかし, /av, áv/ の実現形としての [aɔw, ɔw] は [ø] の変化以前から安定して存在しており, /v/→[w] は前述のように後舌(短)母音(状音)後のみでなく, 前舌母音(状音)後にも現れる。そして /-g/ は §§1.3., 1.4. で述べたように原則として長母音の後にのみ現れる。それゆえ, [aɔw, ɔw] の [w] を /-g/ からとする積極的な理由はみつからない。ただ, [aɔw] は fag~faglig, fagmand [fá:(j)]~[¹fawli], [¹faw₁man'] などの形態音韻交替形に現れる。この交替は音素のレベルで /a:g/ が /ag/ に変わり, その後 /ag/ が [aɔw] となるものであるが, faglig, fagmand などの fag- を基底では /fa: g-/ としておくことはできよう。

結論として, 一部の形態音韻交替形に現れる [aɔw] はたとえ別としても, その他の全ての [aɔw, ɔw] は /av, áv/ の実現形と解釈したい。通時的にみると, §1.5. で示したように, この環境の大部分の /-g/ と /-v/ は [ø] 変化以前に中和していたのである。共時的にも, /-g/ は現れないのであるから, /-g/ と /-v/ の中和はないことになる。したがって, 本節で示した sagn, savn, dog, tov などの形態音韻交替のない語においては g も v も音素的には /v/ ということになる。すなわち, [aɔw, ɔw] は各々 /av/, /áv/ という基底短母音 + /v/ である。これに対し, faglig [fawli] などの [-aɔw] は基底では長母音 + /-g/, つまり /-a: g/ とする。このように解釈すると, /-g/ は基底短母音の後には現れないという仮定が依然として有効となる。

2.9. 音節末で /-g/ が子音の後にくるとしたら, /-l/ または /-r/ の後のみである(ただし, §2.11. [ɹ] (<-ng/) は除く)。

/-l/ の後では /-g/ は [j] またはゼロとなる(規則(ii))。[j] は /-j/ の実現形としても用いられる。この後者の [j] は決してゼロとなることはない。

本来 [-lɔ̃] であった語にはたとえば次のようなものがある:

単音節形: elg, fælg, helg, svælg, salg, talg, valg (いずれも名詞);

複音節形: bevilge, bælge, helgen (n.), sælge, vælge, bølge (n.), dølgе, følgе, alge (n.), galge (n.) ((n.) 以外は動詞)。

これらの -lg(e) を /-lg(ə)/ とみなすことにして, /-g/ は [j] またはゼロとなるわけであるが, ゼロとなる傾向がとくに強いのは, salg, valg, これに対応の動詞 sælge, vælge, および følgе の基本語彙とみなし得る語においてである。この他でも, 複音節形より単音節形中の /-g/ の方がゼロとなりやすい。

さて, 単音節形末には /-lj/ は現れないので, これと /-lg/ の中和はない。/-j/ はいかなる場合にも [j] で実現され, ゼロとなることはないので, [-l] の後の‘不安定な’ [-j] は /-g/ の実現形ということになろう。そして, -lg の g が必ずゼロということになれば, 音素 /-g/ は存在しないことになろう。

単音節末の [-lj] が不安定である理由は §3.3. で述べることにして, 次に複音節(単形態)形をみてみよう。たとえば, 次の語の -lg- も -lj- もともに [-lj-] である: følgе: (porto)følje, (be)vilge: (vel)vilje, bølge: sølje, galge: balje。ただし, g の方はゼロとなり得るのに対し, j の方は必ず [j] となる。それゆえ, g は /-g/, j は /-j/ ということにする。

ところで, 音節境界はどこにくるのであろうか。「複音節形に現れる子音

結合は原則として単音節形に現れる結合である」という一般的仮説に従うと、 $/-lj/$ は単音節形には現れないので、 $/-ljə/$ の音韻的音節境界(= $/+ /$) は $/l+jə/$ ということになろう。音声的にもこの境界位置は (§3.3.で述べる) sonority のランクの一般原則にも一致する。

一方、 $/-lgə/$ の方は単音節形に $/-lg/$ があるので $/lg+ə/$ とできよう。もし $/l+gə/$ だとすると、 $/g/$ は音節頭に立つことになり、 $[g]$ とならなくてはならないことになる。しかし、音節頭 $/g-/$ は $/ə/$ の前では $[j]$ となるとすることはできよう：cp. Helge (男子名) $[^hæljə]$ 対 Helga (女子名) $[^hælgə] = /hel+gə/$ 対 $/hælg+ə/$ 。このように解釈した場合、Holger (男子名) $[hɔl'gɔ]$ の $[g]$ は $/ə/$ の前に現れているので、 $/g-/$ ではなく $/k-/$ ということになる、すなわち、 $/hålkær/$ (cp. alger $[aljɔ] = /al+gær/$)。

いずれにせよ、音声的には $[l]$ と $[j]$ の間に音節境界を置く方が sonority の原則からみて自然であろう。以上のことをまとめてみると、 $/-lgə/$ と $/-ljə/$ の $/g/$ と $/j/$ はこの環境では中和するといえよう。ただし、 $/g/$ がゼロとはならず、 $[j]$ で発音された場合のことである。繰返すが、 $/j/$ からの $[j]$ は必ず発音される。

2.10. 音節末 $/-g/$ は $/-r/$ の後では $[w]$ で実現される (規則(iii))。 $[w]$ は $/-v/$ の実現形でもあるため、 $/-g/$ と $/-v/$ はこの環境で中和する：

væрге = verve $[væ.rw:]$, færge, hverve, bjerg, skærv, sørg,
tørv, borg, torv, etc.

上例はいずれも形態音韻交替のないもので、この場合の $[w]$ は $/-g/$ または $/-v/$ のどちらか一方の音素とみることは十分可能であろう。ただ、§2.5.の場合と同様 $/-v/$ からの $[w]$ は $[v]$ となることもあるので、ここ

では *g* は /-g/, *v* は /-v/ とすることにする。また、形態音韻交替のある形では /-rg/ の /-g/ は他の音になることもあるし、 /-rv/ の /-v/ も [v] となることがあるので /-r/ の後に /-g/ が決して現れないということではない。

2.11. [ŋ] が /-ng/ から派生すると解釈する根拠として Basbøll (1974, 7ff.) は次のことを挙げている。

音節末有声子音に *stød* が起こるとしたら、その後にもう一つ基底子音が後続しなければならない。単音節形中の [ŋ] には後述のフランス借入語を除き必ず *stød* が起こる: *ring* [ræŋ'], *seng* [sæŋ'], *gang* [gaŋ'], *lyng* [løŋ'], *ung* [aŋ'], *etc.* それゆえ、[-ŋ'] を音素的には /-ng/ とすれば、/-n/ に *stød* が起こると言える。そして、/-n/ は後続子音と調音点同化を起こし [ŋ] となり、その後 /-g/ は何らかの中間段階を経て脱落すると Basbøll はいう。この *stød* 生成規則のためのみなら、*stød* をもつ [ŋ] を /-ŋŋ/ としてもよいと思われるが (cf. 拙論 *Idun* III, 1976), Basbøll は diftong [dif'tɔŋ]-diftongere [diftɔŋ'ge:ɔ] の交替を示し、後者の [-ŋg-] は /-ng-/ を基底にしなくては派生させることができないという。しかし、彼は上例の diftong をはじめフランス借入語とか擬音語では [ŋ] に *stød* は起こらないので (*balkon* [bal'kɔŋ], *accent* [ag'saŋ], *boomerang* [bumə'raŋ]), この [ŋ] は /ŋ/ と認めるべきかもしれないという。換言すれば、diftong の [ŋ] には *stød* が起こらないので、この [ŋ] を /-ng/ とするわけにはいかないことになる。

さしあたり本論では [-ŋ] の音韻的解釈は未解決のままにしておくが、いずれにせよ、[ŋ] は表層の [θ] が変化した結果ではないので、このほかの音節末 /-g/ とは事情が異なる。

3.1. 以上、§2. の各節で示したように、音節末 /-g/ は消滅したり (cf. §§2.2., 2.3.), 他の音素に吸収されたり (cf. §§2.6., 2.8.), あるいは

中和したり (cf. §§2.5., 2.10.) してしまっている。それでもなお /-g/ が音節末に現れると主張するためには、ゼロ～[j]～[w]～[g]の間に形態音韻交替があることを示す必要があろう。そのような交替形は数的にはそれほど多くはないが、それでも以下の例は音節末 /-g/ の存在の可能性を示し得るものといえよう。

I) 屈折変化形：

1) 動詞：不定詞形～*-te* 過去形, *-t* 過去分詞形 = zero/[j]/[w]～[g]交替；

2) 形容詞：原形～*-t* 中性形 = zero～[g] 交替：

1) forlige [ˈfɑːliːə]	forligt(e) [ˈfɑːliɡd(ə)]
sluge [sluː ə]	slugt(e) [slugd(ə)]
bruge [bruː ə]	brugt(e) [brʰɡd(ə)]
søge [søː(j)ə]	søgt(e) [søɡd(ə)]
bage [bɑː(j)ə]	bagt(e) [bagd(ə)]
smage [smɑː(j)ə]	smagt(e) [smagd(ə)]
koge [kɑː wː]	kogt(e) [kɔɡd(ə)]

2) rig[riː]	rigt [rigd]
slig [sliː]	sligt [sligd]
syg[syː]	sygt [sygd]

これらの動詞，形容詞の *-t* 形に現れる *g* は [g] なので /k/ の実現形である (cf. §§1.2., 1.3.)。したがって，原形の /g/ は *-t* 形では /g/→/k/ (および母音短音化) という過程を経ると思われる。しかし，これらの変化はいわゆる不規則変化ではない。動詞の場合は語幹母音が変化しないし，形容詞の中性形は，もし形態変化をするなら，いかなる場合

でも *-t* 形となるからである。

動詞の中, *forlige* は規則動詞第一類 *-de* 過去形語尾をとることもあり, とくに *forliges* の中動態形は *-de* 語尾をとる。

Søge は *'ansøge*, *be'søge*, *for'søge*, *'undersøge* などの使用頻度の高い複合動詞でもその他の *-søge* 複合動詞でも同じ変化をする。これらの動詞も *[j]/zero~[g]* の交替形の数に入れてよいであろう。

Bage, *smage* の */g/* はこの交替形のほか, 次に(Ⅱ)で述べる派生形では *[w]* の形で現れる。

形容詞中性形は上述の *[rigd]*, *[sligd]*, *[sygd]* 形のほかに *[ri:d]*, *[rid]* *etc.* の形がある。Brink/Lund は 1840—1955 年生まれの人々の発音調査をしたが, 調査期の最後の頃は *[g]* のない *[sy:d]*, *[ri:d]* などが一般的になるという (Brink/Lund, 1975, 431)。一方, 我々の学科の客員教授 Henrik Galberg Jacobsen 氏 (王立国語研究所より; 1944 年コペンハーゲン生まれ) の言語では次のように用いられるという ((1) がもっともよく用いる形, (3) はフォーマルで稀にしか用いないという):

rigt: (1) *[rid]*, (2) *[rigd]*, (3) *[ri:d]*, NB. **[ri: d, ri:gd]*; *sligt*: (1) *[sligd]*, (2) *[sli: d]*, (3) *[sli:gd]*, NB. **[slid, sli:d]*; *sygt*: (1) *[sygd]*, (2) *[syd]*, (3) *[sy:d]*, NB. **[sy: d, sy:gd]*.

音韻論の見地からはあまり喜ばしい変異形分布とはいえないようである。また, 奇妙なことに, */-g/* に終わる形容詞の中性形では上述の狭口母音 (状音) の後以外は何ら形態音韻変化は起こらない (cf. 拙論 1978b, §2.2.)。

Ⅱ) 派生・合成形:

3) 本来語の派生・合成形では */-a: g/ [ä:(j)]~/-ag/ [aw]* の交替しかない。しかし, この型の交替をする語は相当数ある:

B) droge(r) (薬) [dra: wɔ] ~ drogist (薬屋) [dra'gisd, dro'gisd]

(n.)	(a.)	(n.)
a) strate'gi: [g]	stra'te:gisk [g]	stra'te:g zero
b) kirur'gi: [g]	ki'rur'gisk [g/w]	ki'rur'g [w]
c) psykolo'gi: [g]	psyko'lo:gisk [g]/zero	psyko'lo:g [g]/zero

(A), (B)の型の例はこれだけしかみつけれなかった。(B)の droge(r) ~ drogist はフランス借入語であるが, たとえば, bandage ~ bandagist [ban'da:ʃə] ~ [banda'gisd], dragé ~ dragist [dra'ʃe] ~ [dra'gisd] などの [ʃ] ~ [g] の交替をみると, drage(r) ~ dragist の [w] ~ [g] の交替は必ずしも体系的なものか確信がない。

これに対し, (C)型は数が多い。(a)は上例しかみつけれなかったが, (b)はこのほか dramaturgi ~ dramaturgisk ~ dramaturg, liturgi ~ liturgisk がある (liturg はなし)。(c)の型は逆引辞典 (Dansk retrograd-ordbog, 1978) をみると80以上の例が示されている。それらの中には学術用語が多数含まれるが, たとえば, analogi, biologi, pædagogi, sociologi, teknologi, zoologi などはかなり一般的な語と思われる。なお, analog は形容詞 (英: analogous), katalog (カタログ) は事物を示す名詞であるが, 大多数の語では -log は '行為者' を示す名詞派生辞である。

3.2. §3.1. で示した本来語および 外来語の屈折・派生・合成形における 形態音韻交替を /-g/ の実現形規則 (§1.4.) の順にまとめてみる:

(i) zero~[g]:

forlige, sluge(v.)—屈折;

rig, syg(a.)—屈折;

intrige—派生;

(ii) [j]/zero~[g]:

sølge, bage(v.)—屈折;

fag, bage—派生, 合成;

strateg—派生;

(iii) [w] (/zero)~[g]:

koge(v.)—屈折;

droge(r)—派生;

kirurg—派生;

psykologi—派生.

3.3. 標準語の音節末 /-g/ の実現形における音変化は母音化ということである。[ø] の摩擦音性が弱く、調音位置も先行音につれて前後に移動するところから、[j], [w] あるいはゼロとなる。[j] も [w] も無摩擦継続音である。

狭母音状音後の [ø] の‘脱落’は先行母音への同化に他ならない。このことは ligne, sygne, kugle などの本来の短母音状音+[ø] ([iø, yø, uø]) が長母音化した ([i:, y:, u:]) ことにはっきり現れている。本来の長母音状音後の [ø] にも同じ同化が起こったが、音韻的に長・短音の対立しないので、特別に長い長母音があったとしても、それが音韻的に有意義にならなかっただけのことである。前舌母音状音後で [ø] が [j] となり、さらに若年層で脱落していくのも同じ同化現象であろう。[j] の脱落を起こす世代ではもっとも広口の前舌長母音状音の [ä:] は基本母音の位置でいえば 2 番と 3 番の中間の位置であるとのことである (音声学者 Dr. Jørgen Rischel の個人的情報, cf. Bundgaard, 101)。デ語には /i:,

e:, æ:, a:/ の四つの開口度の母音音素があるが、若年層の、この狭い[a:] は /a:/ の実現形である！

子音 [l] の後の [j] が不安定なのは母音への同化とは異なる原因によるものと思われる。一音節内の子音結合は一般に sonority (共鳴性) の高い子音の方が母音に近く位置する。通時的にみて、/-lg/ という子音結合は存在したし、共時的にも /-lg/ の結合順序は何ら不自然ではない。なぜなら、/l/ の方が/g/ よりも sonority が高いからである。音声的にも /-lg/ が [-lθ] であったときは、この順序が自然であるといえる。しかし、[-lθ] が [-lj] に変化した後は事情が異なる。[j] は母音に非常に近い性質をもつ無摩擦継続音で、[l] より sonority が高いので音節末 [-lj] の順序は自然とはいいいにくい。単音節末で子音 + /j/ の結合がずっと存在しない理由もそこにあると思われる。[j] はゼロで実現されることはないので、たとえば /-lj/ を認めると [-lj] と発音しなければならなくなる。(/-lg/ →) [-lj] の [j] が不安定なのはこのためであろうが、それを避けるためであろうか、Andersen (347) によれば、シェラン方言では *valg*, *bølge* などの *-lg* をしばしば [-lg] と発音するとのことである。閉鎖音はもっとも sonority の低い音である。

子音結合の順序が sonority に関係するのは上述の場合だけではない。たとえば、音節末 /-v/ は母音後では無摩擦継続音 [w] になる傾向が強いが、/-lv/ の /-v/ はゼロとなるか摩擦音 [v] となるかで、[w] となることはない。ゼロとなるわけは [-lv] という sonority が逆の順序を避けるためであろうし、[-lv] が現れるのは順序が自然であるからであろう。

/-lg/ に対し /-rg/ が安定しているのは、/-rg/ が [-rw] で実現されるからである。[ɾ] も [w] も無摩擦継続音であるからである。/-rv/ の [-rw] も同様である (cf. /-lv/ の実現形)。[j, w, ɾ, θ] の無摩擦継続音の sonority のランクについては別の機会に考察することにする。

後舌母音状音または [ɾ] の後で [θ] から変化した [w] が安定してい

るのも上述の理由によるのであろう。[o:] の後で [w] が随意的に脱落するのは [w] が非音節的な [o] で、これが先行母音に同化されるためであらう。

/-lga/ の音節境界は実現形が [-lǝə] であったときは [lǝ] と [ə] に置くことができた。というより、[ǝ] は音節末に現れる音であった。しかし、[-lja] に変わってからは sonority のランクを重視すれば [l] と [jə], に分けざるを得ない (cf. §2.9.)。あるいは sonority を無視して [lj] + [ə] とするかである。

音節末子音の母音状音化は、閉鎖音中で /g/ だけというわけではない。/-b/ は [b] で実現されるとしたが (cf. Idun V, §§1.5., 3.1.), 通時的にみれば、かつての /-b/ が現在では /-v/ になった場合が多々ある (cf. 拙論 1978a)。/-d/ は [ð], [d] またはゼロで実現されるが (cf. Idun V 全体), もっとも頻度の高い実現のし方は母音の後で [ð], 子音の後でゼロである。[ð] は現代デ語標準語では摩擦音ではなく、無摩擦継続音である。音韻的に「有聲」([+voice]) の子音は /b, d, g, v, j, r/ であるが (cf. Idun V, §§1.1., 3.1.), これら全ての子音の音節末実現形は母音状音化するかゼロになるのがもっともふつうである。

[j, w, ɹ, ð] が無摩擦継続音であるということは音韻・音声体系にかなりの影響を与えるところとなる。まず、これらの音の前に現れる長母音状音は短音化されるところから、この環境では長・短母音の対立が一部失われる (母音状音の質, stød の有無などで音韻的対立は区別し得る場合がある)。この短音化は単音節形では義務的である。複音節形ではふつう短音化しないが、非常に若い世代ではこの場合も義務的短音化が起こるといわれる (cf. Brink/Lund, 1975, 221ff.). また、この短音化の結果、既存の短母音 (状音) + [j, w] から成る二重母音のほかに新しい二重母音が現われ、さらには, hverv [vər'w] の [ä.rw] のような三重母音さえ現れるようになってきている。とはいえ、現在のところ二・三重母音の存在は音声的な問題で、音素 (子音音素) の変更には至っていない。

これまで述べてきた音節末子音の弱化そして母音化は通時的には標準語のみならず、デ語のほとんど全ての方言にあてはまる。しかし、共時的にはユトランド諸方言では傾向が異なり、ある子音が音韻的または音声的に別の子音に変わるということはあっても、子音は子音として安定している。たとえば [θ] は摩擦性の強い摩擦音として未だに存在する方言は少ない。それゆえ、[θ] は無声子音に後続されるときは無声の [x] になることさえある。

デ語全体の状況とか傾向についてはいずれ別の機会に述べることにして、最後に、二号にわたって述べてきた閉鎖音素とその実現形を示すことにする。音節末 /-b, -d, -g/ は /d/ の実現形の [θ] を除き不安定ではあるが、未だに形態音韻交替を無視できないので、やはり認めるべきであろう。(V は前号 Idun V, VI は本号 Idun VI の拙論の参照箇所を示す；(i), (ii)…は補註参照)：

- 1) 強音節頭第一子音： /p, t, k/→[p, t, k]；
/b, d, g/→[b, d, g]；
- 2) 音節頭第二子音： /b, d, g/→[b, d, g]；
- 3) 弱音節頭第一子音： /p, t, k/→[b/p, d/t, g/k]；
/b, d/→[b, d]
(以上, V, §3.1.)
/g/→ (i)[j],
(ii) [g] (VI, §§2.9., 3.3.)；
- 4) 音節末： /p, t, k/→[b, d, g]；
/b/→ [b] (以上, V, §3.1.)；
/d/→ (iii)[θ],
(iv)zero,
(v)zero,

- (vi) [d] (以上, V, §§3.1., 3.3.)
/g/→ (vii) zero,
(viii) [j]/zero,
(ix) [w](/zero).

補註：

- (i) : /-lgə/を /l+gə/ と解釈した場合；
(ii) : (i)の解釈 をしない場合；
(iii) : 母音の後 (/[+vocalic]__)；
(iv) : /r/ を歯音 ([+dental]) とし，短母音+/r/ を [+foreign] と解釈する場合：音韻的本来語形態素中の歯音の後 (/[+dent, -foreign]__)；
(v) : /r/=[-dental] とした場合，規則(v)を追加する：長母音+/r/の後 (/[+voc, +long] [+cons, +uvular]__)；
(vi) : その他の場合；
(vii), (viii), (ix) : 各々 VI, §1.4. (i), (ii), (iii) をみよ。

Dania-IPA 対照表（音長は省略）

Dan	IPA	Dan	IPA	Dan	IPA	Dan	IPA
i	i	y	y	u	u	ə	ə
e	e _⊥	ø	ø _⊥	o	o _⊥		
æ	e(ɾ)	ö	ø(ɾ)	å	oɾ		
ä	ɛ(ɹ)	ï	œ(ɹ)	ä	ɯ _⊥		
ä	ɛɾ	ɹ	œɾ	ɔ	ɯɿ		
a	ɛɾ			ɑ	ɑ		
p	b ^h	f	f	m	m	ö	ö
b	b	v	v	n	n	ï	ï
t	d ^h	s	s	ŋ	ŋ	w	ɯ, ɹ
d	d	ʃ	ʃ			ɹ	ɹ
k	g ^h	j	j	l	l		
g	g ^h	h	h	r	ɾ		
		ʔ	ʔ				

参 考 文 献

(本論で直接参照したもののみを示す；

その他は *Idun* V の参考文献参照)

Andersen, Poul (1954) : *Dansk Fonetik*, Copenhagen.

Basbøll, Hans (1973) : *Konsonanter (i dansk rigsmål, fonologisk set)*, (mimeographed). Institut of Phonetics, Univ. of Copenhagen, Copenhagen.

Bundgaard, Michael (1980) : “An acoustic investigation of intrinsic vowel duration in Danish”, *Annual Report of the Institute of Phonetics, Univ. of Copenhagen* Vol. 14, 99—119.

Brink, Lars & Jørn Lund (1974) : *Udtaleforskelle i Danmark*, Copenhagen.

— “ — (1975) : *Dansk Rigsmål*, Copenhagen.

岡瀬英夫 (1976) : 「デンマーク語の長・短母音——母音音長は後続子音の数から予測できるか——」, *Idun* Vol. 3, 3—34.

— “ — (1978a) : 「子音の調音点と調音力の関係——デンマーク語の場合と一般音韻的問題——」, 大阪外大学報第42号, 109—120.

— “ — (1978b) : 「デンマーク語母音の音長変化」, *Idun* Vol. 4, 3—18.

— “ — (1980) : 「デンマーク語の子音(その一)——閉鎖音音素——」, *Idun* Vol. 5, 3—33.

(*Idun* V 参考文献追加：)

Rischel, Jørgen (1970) : “Consonant Gradation: A problem in Danish Phonology and Morphology”, *Proc. Int. Conf. Nord. and Gener. Ling.* 1969, 460—480.